I.『コジ・ファン・トゥッテ』

コジ・ファン・トゥッテ、または恋人たちの学校
Cosi fan tutte, ossia la scuola degli amanti　K.588
２幕のオペラ・ブッファ

「コジ・ファン・トゥッテ」とは
「女はみんなこうしたもの」の意。［音楽中辞典］

１．登場人物とストーリー

あらすじ

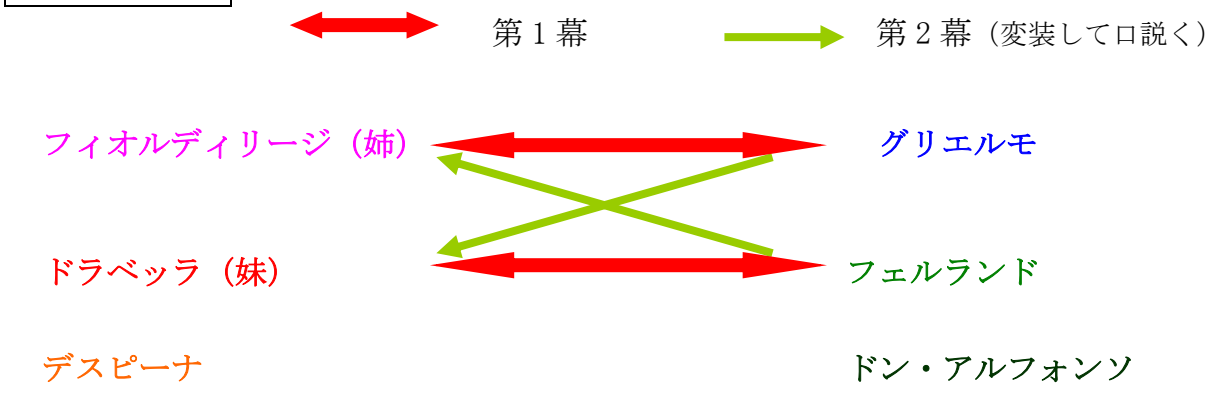
18 世紀のナポリを舞台に、姉妹を許婚とする 2 人の士官が、女性の貞操を試そうと芝居を打つ。　[音楽中辞典]

登場人物

フィオルディリージ　・・・　ナポリに住むフェッラーラ出身の姉妹の姉　（ソプラノ）
ドラベッラ　・・・　フィオルディリージの妹　（ソプラノ）
グリエルモ　・・・　士官、フィオルディリージの恋人　（バリトン）
フェルランド　・・・　士官、ドラベッラの恋人　（テノール）
デスピーナ　・・・　姉妹の小間使い　（ソプラノ）
ドン・アルフォンソ　・・・　老哲学者　（バス）

[堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』]

登場人物相関図



ストーリー

＜第１幕＞

士官のフェルランドとグリエルモは、二人の恋人であるフィオルディリージとドラベッラの姉妹の美貌と貞節を自慢している。それを聞いた老哲学者ドン・アルフォンソは女性の貞節など信じてはいけないと言う。そこで三人は、芝居をして、姉妹の貞節について賭けることにした。

哲学者は、姉妹のもとに行き、彼女たちの恋人たちが戦地に行くことになったことを告げる。嘆き悲しむ姉妹。そして別れの五重唱。その後、哲学者がアルバニア人に変装したフェルランドとグリエルモを連れて、姉妹に紹介する。早速、二人は姉妹に愛を告げるが、相手にされない。次は、二人が薬びんを持って登場、姉妹の前で、服毒自殺のふりをして倒れ、接吻を求める。が、拒絶する姉妹。

＜第２幕＞

しかし女中が姉妹に男遊びをすすめるので、姉妹も少し楽しんでみようかという気分になる。ドラベッラは姉の婚約者グリエルモが変装している男に目をつけ、フィオルディリージは妹の婚約者フェルランドが変装している男にしようという。

まずはドラベッラがグリエルモに口説き落とされ、フィオルディリージもフェルランドの胸に抱かれる。そして、姉妹とアルバニア人たちとの結婚式が始まる。すると、遠くから軍隊の帰還を告げる合唱が聞こえる。男二人は引き下がり、変装をとって士官姿で姉妹の前に現れる。グリエルモはそこにあった結婚証明書を見つけて、怒り出す。姉妹は死んで不実を詫びようとする。しかし最後は、哲学者が、恋人たちに本当の愛を勉強させるための芝居であったことを明かす。　　[山田治生ほか『一冊でわかるオペラガイド 126 選』]

メスマーの石

デスピーナ：これがあの磁石のかけらです。**メスマーの石**で、始まったのはドイツで、そのあと大変有名になったのはフランスの地でした。
（磁石の一片で仮病人たちの頭に触り、彼らの体を上から下へと優しくさする）　[海老沢敏　訳]

第１幕後半　磁石の場面

フランツ・アントン・メスマー
(1734-1815)

医者。ウィーンで学び、同地で開業。1772 年頃“動物磁気”と彼の命名するある種の力が存在すると考え始める。これを発展させて作り上げたメスメリズム(動物磁気説)は、近代心理療法における催眠術の先駆。　　[世界人名辞典]

2．聴きどころ

三組の男女がシンメトリカルに配され、二重唱や三重唱、四重唱で組み立てられてゆく構成。
もともと重唱の多いのがモーツァルトのオペラ・ブッファの特徴だが、『コシ・ファン・トゥッテ』はそれが極限に達している。独唱と重唱の比率は１２：１９となっている。

聴きどころ　①　「風は穏やかに　Soave sia il vento」
三重唱　第 1 幕第 10 番（フィオルディリージ、ドラベッラ、ドン・アルフォンソ）

ロココの優美の極みも、『コジ・ファン・トゥッテ』のもの。船出をする士官を見送る、フィオルディリージ、ドラベッラ、そしてドン・アルフォンソの小三重唱「風よ穏やかに」。波を描く弦の響きの上に、三人の声がきれいに重なり合う。ごく短く、しかも単純な、ホ長調アンダンテの歌だが、優しい美しさでいっぱい。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*風が穏やかにあり　波が静かにあり　そして自然の万物が慈愛にみち応えてくれるよう、*
わたしたちの願いに。

聴きどころ　②　「風にも嵐にも Come scoglio immoto resta」
独唱　第 1 幕第 14 番（フィオルディリージ）

フィオルディリージの一番の聴かせどころ。低声を使って始まり、強い意志を装飾的な技で示してゆく。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*岩が不動であるように、風や嵐にも、そのように常にこの心は堅固です、操もそして愛情も。*
こうした松明は私たちにはもともとありました、それが私たちを喜ばせ、慰めています、
ですからただ死のみにできましょう、この心に愛情を変えさせることは。・・・

聴きどころ　③「ぼくらの恋人からの愛のそよ風は Un'aura amorosa」
独唱　第 1 幕第 17 番（フェルランド）

実に甘く抒情的で、テノールの名歌というべきだろう。イ長調、アンダンテ・カンタービレのこの歌も、このオペラのロココの優美の代表例。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*僕たちの尊い宝の　愛の息吹は　甘い安らぎを　この心に与えてくれよう。*
この心に、この愛の希望に養われ　それ以上の糧など　必要としない心に。

聴きどころ　④「女は 15 にもなれば Una donna a quindici anni」
独唱　第 2 幕第 19 番（デスピーナ）

第 2 幕の冒頭を飾る、デスピーナの「女も十五になれば」。激烈にして軽快なアリア。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*女も 15 歳になれば　世の中のことはみな知らなければ、悪魔はどこにシッポがあるか、*
何がよくって何が悪いか。
恋人たちを夢中にさせる　手管も知らなければ、作り笑いも空涙もできなければ、
うまい言いわけも考え出せなければ。・・・

聴きどころ　⑤「私はあの栗色のほうがいいわ Prendero quel brunettino」
二重唱　第 2 幕第 20 番（フィオルディリージ、ドラベッラ）

姉妹がそれぞれ相手を品定めする二重唱。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*（ドラベッラ）わたしはあの黒髪をとることにしてよ、こっちのほうが面白そうなので。*
（フィオルディリージ）それならわたしは金髪とちょっと笑ったり、ふざけたりしてみたいわ。
（ドラベッラ）ちょっぴりお遊びで、あの方の甘い言葉に　わたし、応えることにしましょ。
・・・・・

聴きどころ　⑥「恋は小さな泥棒 E amore un ladroncello」
独唱　第 2 幕第 28 番（ドラベッラ）

積極的に生を楽しむドラベッラの本領は、第 2 幕後半のアリア。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*恋はちいちゃな悪戯っ子、恋はちいちゃな蛇。それで安らぎを奪ったり与えたり*
好みのままよ、人の心に。
瞳から胸のうちへと　通り道を開いていくとすぐ　人の心を鎖でつなぎ
そして自由を奪ってしまうの。
甘さと美味しさをもたらすわ、あなたが恋のなすままに任せれば、
でも苦味でいっぱいにしてよ、もし刃向かおうとすれば。
もし恋があなたの胸に入り込んで　もしあなたのここを突いたら
すべて恋の命じる通りになさい、わたしもそうすることにしていてよ。

聴きどころ　⑦「間もなく私は許婚者の胸に抱かれるのだわ
Fra gli amplessi in pochi istanti」
二重唱　第 2 幕第 29 番（フィオルディリージ、フェルランド）

第 2 幕後半の、フィオルディリージがフェルランドに陥落するときの二重唱。テンポが変わり、一気に二人が接近してから情熱的な愛の二重唱になる。

館内配付資料には譜例を掲載しています

対訳：*（フィオルディリージ）もう少しで抱擁のなかへ　真ある許婚の抱擁に行きつくのだわ、*
でもわたしと見分けられずにあの方の前へ　この服装で出るのよ。
ああ、どんなにか喜びをあの方の美しい心は　わたしと分かったら味わうことでしょう！
（フェルランド）その一方で悲しみのため　哀れにも僕は死ぬでしょう！
（フィオリディリージ）なんてこと！　見つけられてしまったわ！　どうか、出ていらして・・・
（フェルランド）ああ、いやだ、僕の命よ！
この剣で、あなたの手で　あなたがこの心臓を刺すのです、もしその力が、ああ、
あなたにないなら　僕があなたの手を支えましょう。　・・・

［『モーツァルト　オペラのすべて』］
［対訳　『オペラ対訳ライブラリー』小瀬村幸子訳］

フィナーレ

［ドイツの影絵作家ロッテ・ライニガーの作品］

Ⅱ．モーツァルトのオペラ

1．モーツァルトの生涯　ーオペラを中心としてー

1756 年(0 歳)　ザルツブルクに生まれる
1768 年(12 歳)　オペラ・ブッファ《ラ・フィンタ・センプリチェ》を作曲
1770 年(14 歳)　ミラノ大公家宮廷劇場でオペラ・セリア《ポントの王ミトリダーテ》を初演、大成功をおさめる
1781 年(25 歳)　ミュンヒェン宮廷劇場でオペラ・セリア《イドメネオ》を初演
大司教と決裂。ザルツブルク宮廷楽団を解雇される
1782 年(26 歳)　ブルク劇場でジュングシュピール《後宮からの誘拐》を初演、大成功をおさめる
1786 年(30 歳)　ブルク劇場でオペラ・ブッファ《フィガロの結婚》を初演
1787 年(31 歳)　プラハ国立劇場でオペラ・ブッファ《ドン・ジョヴァンニ》を初演、大成功をおさめる
1790 年(34 歳)　ブルク劇場でオペラ・ブッファ《コジ・ファン・トゥッテ》を初演、成功をおさめる
1791 年(35 歳)　プラハ国立劇場でオペラ・セリア《皇帝ティートの慈悲》を初演するが、不評に終わる
ヴィーデン劇場でジングシュピール《魔笛》を初演、成功をおさめる
12 月 5 日死去

［西川尚生『モーツァルト』（人と作品）］

「オペラ・ブッファ opera buffa」とは
「ふざけたオペラ」。喜歌劇と訳されることもある。18 世紀のイタリアで喜劇的なオペラに対して与えられた呼称で、オペラ・セリア（重厚なオペラ）と対照的に用いられた。　[クラシック音楽事典]

「オペラ・セリア opera seria」とは
オペラ・ブッファに対する語で、正歌劇などと訳される。神話や伝説的英雄物語などの抒情的悲劇を題材とし、ドラマティックなレチタティーヴォと声の魅力を発揮するアリアが特徴。18 世紀ナポリ派オペラで成立、その後オペラの主流をなした。　[クラシック音楽事典]

「ジングシュピール Singspiel」とは
歌芝居とも訳される。本来ドイツ風の歌や音楽を伴った劇全般を意味したが、18 世紀中頃からドイツ固有の民衆的な歌劇を指すようになり、喜劇的な内容で地の台詞が音楽の間にはさまれて筋が展開されるのを特徴とする。　[クラシック音楽事典]

2．台本作家　ロレンツォ・ダ・ポンテ

Lorenzo Da Ponte

1749.3.10　-　1838.8.17

イタリアの脚本家。本名エマヌエーレ・コネリアーノ Emanuele Conegliano。ユダヤ系イタリア人でカトリックに改宗。ウィーンで宮廷詩人として多くの歌劇脚本を書くが、なかでもモーツァルトの『フィガロの結婚』Le Nozze di Figaro (1786)、『ドン・ジョヴァンニ』 Don Giovanni(87)、『コシ・ファン・トゥッテ』Cosi fan tutte (90) が著名。のびやかな構成と簡潔で的確な語法に特徴がある。『回想録』Memories (1807) では自らの放浪生活を通して当時の文化状況や人物を描いている。　[世界文学大事典]

ダ・ポンテ　年譜

1749 年	0 歳	ヴェネツィア近郊の村にユダヤ人の皮革商人の長男として生まれる
1763 年	14 歳	カトリックに改宗し、その際の司教の名をもらって以後ロレンツォ・ダ・ポンテと名乗る。当地の司教学校に入学。
1773 年	24 歳	ヴェネツィアから追放される。
1783 年	34 歳	サリエーリの紹介でヨーゼフ 2 世に拝謁。宮廷劇場詩人に任命される。
1785 年	36 歳	モーツァルトと『フィガロの結婚』の仕事に取りかかる。
1787 年	38 歳	『ドン・ジョヴァンニ』がプラハで初演され、大成功を収める。
1790 年	39 歳	『コジ・ファン・トゥッテ』がウィーンのブルク劇場で初演される。
1791 年	40 歳	皇帝レーオポルト 2 世の庇護を失い、ウィーンから追放される。
1792 年	41 歳	ロンドンに渡る。
1805 年	56 歳	アメリカに渡る。
1826 年	77 歳	ニューヨークで『ドン・ジョヴァンニ』のアメリカ初演に関わる。
1833 年	84 歳	ニューヨークで米国最初の常設歌劇場の設立に参画。
1838 年	89 歳	老衰のため、ニューヨークで死去。

［『フィガロの結婚』　新国立劇場］

３．ダ・ポンテ三部作

＜Ⅰ＞　フィガロの結婚　Le nozze di Figaro K492

４幕のオペラ・ブッファ　（イタリア語）

もとになったのはフランスの劇作家ボーマルシェの同じ題名の戯曲

1786 年 5 月 1 日、ウィーンのブルク劇場で初演

［堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』］

あらすじ

『セビーリャの理髪師』の後日談で、才気煥発のフィガロとスザンナが、横恋慕するアルマヴィーヴァ伯爵を出しぬいて、幸福な結婚にいたるまでをえがく。序曲や『もう飛ぶまいぞ、この蝶々』『恋とはどんなものかしら』などのアリアは有名。　[音楽中辞典]

台本について

ウィーンで 1783 年に、前年ペテルブルクで初演されていたパイジェッロの『セビリャの理髪師』が上演された。これを聴いたモーツァルトが、ボーマルシェとその芝居に関心を持った。『フィガロの結婚』のオペラ化を考え、ダ・ポンテに持ちかけたのは、モーツァルトのほうだったらしい。

翌 1784 年 4 月 27 日、パリのコメディ・フランセーズで、ついにボーマルシェ作の芝居の『フィガロの結婚』が初演された。・・・

パリにおける人気はウィーンにも伝わったが、上演はできない。エマヌエル・シカネーダーが上演を計画したが、皇帝により禁止されてしまった。身分制度をあざ笑う風刺劇は、帝国の首都においても、当然危険な作品だった。だがそれだけに『フィガロの結婚』はこの上ない話題作でもあった。オペラ化して、もし上演できれば、評判になるのは間違いない。モーツァルトに話を持ちかけられたダ・ポンテは、乗り気になる。なんとか上演できると読んだのだ。ちょうどこの頃、サリエリが別の台本作家と組んでいたので、何か手を打たなければならない、という事情もあったようだ。

[堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』]

ボーマルシェ

初演でスザンナを歌った
アンナ（ナンシー）・ストーラス

初演でドン・バジーリオとドン・クルツィオ
を歌ったマイケル・ケリー

＜Ⅱ＞　罰せられた放蕩者、またはドン・ジョヴァンニ

Il dissotulo punito, ossia Don Giovanni　K527

２幕のドランマ・ジョコーゾ　（イタリア語）

1787 年 10 月 29 日、プラハの国民劇場（現スタヴォフスケー劇場）で初演

［『モーツァルト　オペラのすべて』］

あらすじ

17 世紀スペインの騎士ドン・ジョヴァンニ（ドン・ファン）は、放蕩の限りをつくし、最後は殺した騎士長の石像によって地獄へ落とされる。序曲や『カタログの歌』などは有名。　[音楽中辞典]

台本について

《フィガロの結婚》は初演に引き続き、9 回もの上演がウィーンで行なわれたが、さらにプラハで大きな成功をおさめたことから、モーツァルトとダ・ポンテは、ボンディーニ一座の上演に供するための、もうひとつのオペラ作品の制作へと取りかかる。しかしボンディーニが、ドン・ファン伝説に基づくベルターティの台本に曲を付けたらどうかとモーツァルトに提案していた頃、ちょうどダ・ポンテは、マルティン・イ・ソレールやサリエーリのための台本作りに追われ、多忙な日々を送っているところであった。しかし、多忙のなかで完成されたダ・ポンテの台本は、それまでのドン・ファン伝説の系譜、すなわちティルソ・ダ・モリーナによる最初の劇作品、モリエール作の《ドン・ジュアンまたは石像の客》(1665)、ゴルドーニの韻文による劇作品《ドン・ジョヴァンニ・テノーリョまたは放蕩者》(1736)、リギーニの《石の客人または放蕩者》、そしてベルターティがガッザニーガのために書き、大成功をおさめた 1 幕からなるオペラ台本《ドン・ジョヴァンニ・テノーリョあるいは石の客人》(1787 年 2 月)など、それぞれの要素を兼ね備えたものであった。　[モーツァルト大事典]

初演のポスター

フィナーレにおける食事の場面では居並ぶ楽隊によって三つの音楽が引用される。

それらは、マルティン・イ・ソレールの『椿事 Una cosa rara』(1786 年)およびジュゼッペ・サルティの『争う二人の間で Fra I due litiganti』(1782 年)の一節、そしてモーツァルト自身の「もう飛ぶまいぞ」である。

［磯山雅『モーツァルト　二つの顔』］

＜Ⅲ＞　コジ・ファン・トゥッテ、または恋人たちの学校

Cosi fan tutte, ossia la scuola degli amanti　K588

２幕のオペラ・ブッファ　（イタリア語）

1790 年 1 月 26 日、ウィーンのブルク劇場で初演

［堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』］

台本について

ダ・ポンテの三つ目の共作であり、モーツァルト最後のオペラ・ブッファとなった作品だが、ダ・ポンテはこのオペラの台本を、もともとサリエリのために執筆したらしい。ところがサリエリが第一幕冒頭の二曲の三重唱とレチタティーヴォに手をつけただけで作曲をやめてしまったため、この台本はモーツァルトにまわされることになった。

サリエリには 1778 年にヴェネツィアで初演され、1783 年にウィーンでも上演された『やきもち焼きの学校』という台本があり、ダ・ポンテはそれを意識して、このオペラに最初は『恋人たちの学校』という題名をつけたらしい。ところがサリエリが作曲を降り、モーツァルトが新たな作曲者に決まったことから、『フィガロの結婚』第一幕のバジーリオの歌詞を借用した『コシ・ファン・トゥッテ』という新たな題名がつけられ、『コシ・ファン・トゥッテ、あるいは恋人たちの学校』というこのオペラの正式名が生れることになったのである。

［西川尚生『モーツァルト』（人と作品）］

『フィガロの結婚』第一幕

バジーリオ：

Cosi fan tutte le belle!

お美しい御婦人方は、

皆こんなもんで！

Non c’e alcuna novita.

別に珍しい事では

ございません。

［オペラ対訳双書

フィガロの結婚］

館内配付資料には譜例を掲載しています

初演について

ミヒャエル広場に面した初演時のブルク劇場

初演のプログラム

初日に皇帝は臨席しなかった。病床にあったのだ。オペラは 1 月 28 日、30 日と上演されて・・・。しかし上演は打ち切られる。2 月 20 日にヨーゼフ 2 世が死去したからだ。・・・劇場は喪に服して、上演は中止された。6～8 月に再演はされるが、成功せず、上演は終る。上演されたのは計 10 回で、モーツァルトの生前、ウィーンで上演されることはなかった。

[堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』]

初演でグリエルモを歌った
フランチェスコ・ベヌッチ

初演の批評

《デラックス・アンド・モード誌》（ウィーン）

「わが劇場ではモーツァルトの新しいすばらしい作品をやっている。・・・その題名は『コシ・ファン・トゥッテ』。音楽についてはそれがモーツァルト作であることがすべてを物語っていよう。」

ニコラウス・L・ツィンツェンドルフ伯の日記

「新しいオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』を観る。モーツァルトの音楽は魅力的で、内容はとてもおもしろい。」

[チャンパイほか『モーツァルト　コシ・ファン・トゥッテ』]

その後の『コジ・ファン・トゥッテ』

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン　から　ルートヴィヒ・レルシュタープへ　1825 年 5 月

《ドン・ジョヴァンニ》や《コシ・ファン・トゥッテ》のようなオペラは私には作曲できないでしょう。こうしたものには嫌悪感を感じるのです。このような題材を私が選ぶことなどありえません。私には軽薄すぎます。

[チャンパイほか『モーツァルト　コシ・ファン・トゥッテ』]

エドゥアルト・ハンスリック　1875 年

台本の際限もない平板さこそ、モーツァルトが《コシ・ファン・トゥッテ》につけた愛すべき音楽をいたるところで抹殺しているものだ。われわれの時代の教養の力ではどう努力してもこれらを和解させることはできない。

ダ・ポンテの原作台本は知性を欠く、無作法なものだ。なぜなら、そこではふたりの男が、その恋人たちをまどわし、数時間以内に不貞をおこなわせてしまうのに成功するのだから。・・・

[チャンパイほか『モーツァルト　コシ・ファン・トゥッテ』]

リヒャルト・ワーグナー　《オペラとドラマ》　1851 年

あらゆる音楽家の中でもっとも天分に恵まれたこの人は、現代のわが音楽製造人たちの曲芸をなんとわずかしか知らなかったことだろう。彼らは無味乾燥で価値のない基礎の上に黄金に光り輝く音楽の塔をうち建て、詩作品のいっさいが無趣味でからっぽなものでしかないのに陶酔し感激したふりを演じてみせるのである。・・・おお、私は《コシ・ファン・トゥッテ》に《フィガロ》のような音楽を案出することができなかったモーツァルトをどんなに心から愛し、崇拝していることだろう。もしモーツァルトにそんなことができていたとしたら、音楽というものはどんなに破廉恥にはずかしめられていたことだろう！

[チャンパイほか『モーツァルト　コシ・ファン・トゥッテ』]

1881 年に、自筆譜にもとづいた楽譜が出版される。

1897 年、ミュンヘンでリヒャルト・シュトラウスが、
ドイツ語訳だがオリジナルを尊重した台本で、すぐれた
上演を行う。

リヒャルト・シュトラウス

もしわがオペラ劇場が正しい方向に進むならば、《コシ・ファン・トゥッテ》はあらゆるドイツの劇場のレパートリーの中で、せめて、いままで受けるのが当然だった貴賓席をあてがわなければならないだろう。・・・
［チャンパイほか『モーツァルト　コシ・ファン・トゥッテ』］

そして 1900 年には、ウィーン宮廷歌劇場で、
マーラーが、新しい演出の『コシ・ファン・トゥッテ』を指揮する。

これがきっかけで、急激な変化ではなかったが、
20 世紀を通じ、『コシ・ファン・トゥッテ』は名誉を回復してゆく。

第二次大戦後は、『フィガロの結婚』などと並ぶモーツァルトと
ダ・ポンテの傑作として、オリジナルのイタリア語による、力を
入れた上演が行われるようになる。ウィーンやザルツブルク、ベル　　グスタフ・マーラー
リンやロンドンで、一流の指揮者や歌手による上演が繰り返され、
歌劇場のレパートリーに必要不可欠な作品となった。

［堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』］

Ⅲ. 同時代のウィーンのオペラ

1．ハプスブルク家と音楽

オーストリア系ハプスブルク家のもとでの音楽

オーストリア系ハプスブルク家は、フェルディナント１世（神聖ローマ皇帝、在位 1556-64）に始まる。フェルディナントは帝室礼拝堂聖歌隊の再建に力を注ぎ、・・・26 年からは個人礼拝堂の聖歌隊も抱えていた。・・・その後に続く大公たちはイタリア・オペラの発展に力を注ぎ、インスブルックでは特に高い水準のオペラの上演が行われた。・・・レーオポルト１世（在位 1658-1705）の時代には、ウィーンの音楽界におけるイタリア人音楽家の影響力が急速に増大した。・・・レーオポルトの息子であるヨーゼフ１世（在位 1705-11）は、政治家として傑出していたばかりでなく、音楽の奨励にも尽力している。イタリア人音楽家の優位は彼の治世の間も続き、1708 年にはウィーンに歌劇場が新設され、・・・。カール 6 世（在位 1711-40）はすぐれた鍵盤楽器奏者であり、作曲家でもあった・・・29 年にメタスタジオを宮廷詩人に任命している。カールの没後は、娘**マリア・テレージア**(在位 1740-80)が引き継いだ。マリア・テレージアの劇音楽に対する情熱は、ウィーンの演劇界の再編成を促すきっかけとなった。52 年にウィーン市と宮廷がブルク劇場およびケルントナートーア劇場の管理を引き継いだ。・・・**ヨーゼフ 2 世**(在位 1765-90)も、彼以前のハプスブルク家の歴代君主同様、完璧な訓練を受けた音楽家であった。すぐれたバス歌手であり、ヴィオラ、チェロ、鍵盤楽器も演奏し、しばしば伴奏者として宮廷での演奏に加わった。・・・91 年、モーツァルトは**レーオポルト 2 世**(在位 1790-92)がプラハで戴冠された際の祝典のために、《皇帝ティトゥスの仁慈》を作曲した。

[ニューグローヴ世界音楽大事典「ハプスブルク」]

モーツァルトの時代のハプスブルク家の皇帝たち

マリア・テレージア（1717-1780）　＝＝＝＝　フランツ 1 世（1708-1765）

ヨーゼフ 2 世（1741-1790）

レーオポルト 2 世（1747-1792）

マリー・アントワネット（1755-1793）

2．ウィーンで上演されたオペラ

ブルク劇場でのオペラ上演　1781 年～1791 年　上演回数ランキング

第１位　294 回　パイジエッロ　Paisiello, Giovanni (1740-1816)

イタリアの作曲家。18 世紀後半に最も成功を収め、最大の影響力を持ったオペラ作曲家の一人。　[ニューグローヴ世界音楽大事典]

第２位　185 回　サリエーリ　Salieri, Antonio (1750-1825)

ウィーンで活躍したイタリアの作曲家。グルックの庇護を受け、1774 年宮廷作曲家ならびにイタリア・オペラの指揮者、88 年宮廷楽長に就任。

[音楽中辞典]

第３位　141 回　マルティン・イ・ソレール

Martin y Soler (1754-1806)

スペインの作曲家。1785 年以降、ウィーンに居を定め、・・・まもなくヨーゼフ 2 世に気に入られる。86 年には台本作家ダ・ポンテと共同制作を行うようになり、モーツァルトを含む他の作曲家をはるかにしのぐほどの成功を収めた。。

[ニューグローヴ世界音楽大事典]

第４位　124 回　チマローザ　Cimarosa, Domenico (1749-1801)

イタリアの作曲家。18 世紀後半のオペラ、特に喜歌劇の代表的な作曲家である。

[ニューグローヴ世界音楽大事典]

第５位　112 回　グリエルミ

Guglielmi, Pietro Alessandro (1728-1804)

イタリアの作曲家。おもにナポリを中心に 100 曲を超えるオペラを書く。

[音楽中辞典]

第６位　108 回　サルティ　Sarti, Giuseppe (1729-1802)

イタリアの作曲家。79 年ミラノ大聖堂の楽長に就任してからは、彼のオペラはヨーロッパ中で人気を得た。　[音楽中辞典]

第７位　105 回　モーツァルト

Mozart,　Wolfgang Amadeus (1756-1791)

宮廷ブルク劇場における上演作品と回数　1783 年～1791 年

（L．ゾンライトナーによる。ただしイタリア語作品のみ）

年代	公演総数	公演回数の最も多い作品	モーツァルトの作品
1783	103	サルティ《争う二人の間で》25 回	0
1784	134	パイジェッロ《ヴェネツィアのテオドーロ王》10 回	0
1785	125	パイジェッロ《才気ある田舎女》18 回	0
1786	129	サリエーリ《トロフォニオの洞窟》13 回	《フィガロ》9 回
1787	123	グリエルミ《恋の策略》18 回	0
1788	129	サリエーリ《アクスル》29 回	《ドン・ジョヴァンニ》15 回
1789	150	マルティン《ディアーナの木》、《椿事》各 19 回	《フィガロ》11 回
1790	132	マルティン《ディアーナの木》21 回	《フィガロ》15 回 《コシ》10 回　　計 25 回
1791	156	グリエルミ《美しい漁師の娘》27 回	《フィガロの結婚》3 回

［磯山雅『モーツァルト　二つの顔』］

ブルク劇場　Burgtheater

正式名称は「王宮に隣接する国立劇場」。これが「宮（ブルク）劇場」と略称されている。・・・1776 年の「宮廷劇場令」により、18 世紀末までにウィーンのオペラ制作の中心地となった。

［オックスフォード　オペラ大事典］

現在のブルク劇場

1830 年頃の内部の様子

初演時のブルク劇場は、1888 年に取り壊された

3．サリエーリとダ・ポンテ

1784 年 12 月 6 日にはブルク劇場で全三幕の喜歌劇《一日成金》が初演された。ヨーゼフ 2 世に命じられて前年春にサリエーリとダ・ポンテが着手した作品である。このオペラはダ・ポンテの台本作者デビュー作となるが、題材が舞台向きでないことから悪戦苦闘を余儀なくされた。・・・サリエーリは《一日成金》の失敗でダ・ポンテと距離を置くようになり、《トロフォーニオの洞窟》と《はじめに音楽、次に言葉》でカスティと組んだ。・・・

1786 年、ヴィーンではイタリア・オペラが 13 作上演されている。・・・6 作はダ・ポンテの台本である。新作を連発し、失敗作も出したダ・ポンテをヨーゼフ 2 世は叱り、「今後は、モーツァルト、マルティン・イ・ソレル、サリエーリのためだけに」台本を執筆するよう命じた。

［水谷彰良『サリエーリ』］

サリエーリとダ･ポンテの共作オペラ

初演年	曲名	ブルク劇場における 1791 年までの上演回数
1784 年	一日成金	7 回
1788 年	オルムスの王アクスール	51 回
1788 年	護符	21 回
1789 年	忠実な羊飼い	6 回
1789 年	花文字	17 回

［水谷彰良『サリエーリ』］［モーツァルト大事典］

カスティ　Casti, Giovanni Battista (1724-1803)

イタリアの劇作家、台本作家。広く旅した後ロシアを訪れ、同地で『だまされた花婿』(1779)を、さらにウィーンで『ヴェネツィアのテオドリウス王』(1784)をいずれもパイジェッロのために書いた。その後サリエリのためにも台本を書き、その中には作曲家の地位の低さを辛辣に風刺した『音楽が第一、言葉は次に［はじめに音楽、次に言葉］』(1786)がある。この作品にはダ・ポンテへの嫌味がいくぶんこめられている。

［オックスフォード　オペラ大事典］